

(前回のまとめ)

夏休み前まで、大江健三郎のデビュー作である「奇妙な仕事」、またそれを収めた最初の短篇集『死者の奢り』、そして大江健三郎の最初の本格的な長編小説「われらの時代」を読んでいった。

その中で、大江健三郎の小説の表現の特徴、そしてそれがいかに新しいものとして当時評論家や一般読者にショックを与えたか(おそらくそれは現在小説家がデビューするのとは全く違ったものだったと思うが)についてふれた。

また、大江健三郎がフランスやアメリカの当時の最新の小説をどのように受容し、新しい自分の小説へと書き換えていったか、についても述べた。

これまでの話してきたこと、特にいくつかの分析の方法は大江健三郎に限らず他の作家の小説なのについてもあてはまることなので、自分で考えたり書いたりする時の参考にしてもらいたい。

さて、今まで扱ってきたのは、時間からすると1957年の5月から1959年の7月までということになる。夏休み明け以後は、予告しておいたように、1963年から1964年にかけて連載されていた「日常生活の冒険」を取り上げることにするが、今回はまず「われらの時代」と「日常生活の冒険」という二つの長編小説の間の時期の大江健三郎について話しておこう。

(『厳粛な綱渡り』の665ページから大江健三郎の年譜が載っているのので、これを使いながら話していく)

この時期の大江健三郎に起こった重要なできごとを追っていくと

1960年 伊丹ゆかりと結婚(俳優・映画監督の伊丹十三の妹)

1961年 「セブンティーン事件」

—『文学界』2月号に掲載された「政治少年死す セブンティーン第二部」について右翼から出版社に抗議があり、出版社が謝罪。

「政治少年死す」はその後単行本に掲載されたことがない。

(「セブンティーン」は前年社会党の委員長を刺殺した17才の右翼山口二矢(おとや)をモデルにした小説(山口二矢については沢木耕太郎が「テロルの決算」というノンフィクションを書いている)。

(この小説は大江健三郎が当時主張していた「政治と性」という図式をもとに書かれており、右翼になった17才の少年が政治的な行動、といってもほとんど暴力的なものなのだが、「右翼の鎧」を着た行動をすることが「性的」な満足に結びついている。「第二部」には主人公の少年が彼の夢の中で登場する「純粋天皇」と同性愛の関係をもちエクスタシーを得る、というような場面まで出て来る。)

おそらく抗議をした右翼は山口二矢の扱い方に抗議したのだろう(彼は拘置所内で事件後自殺しており、右翼の間では英雄視されていた)。しかし、実は天皇の扱い方自体が右翼を刺激するようなものだった。)

ちなみに

「風流夢譚」事件(通称嶋中事件)—『中央公論』に掲載された深沢七郎の「風流夢譚」について右翼が中央公論社の嶋中社長の自宅に抗議に訪れ、家政婦を殺害し、社長夫人をけがさせた。

「風流夢譚」も単行本未収録のまま。

(この小説は小説家が正月に見た夢という設定であり、革命が起きて皇族が死刑になり、ギロチンにかけられた皇太子(現在の天皇)の首が「スッテンコロコロ」転がったところで目が覚めて終わる。)

(渡部直己『不敬文学論』ではその両方が扱われている)

嶋中事件の後、深沢一郎は右翼の襲撃を恐れて日本中を逃げ回るのが、大江健三郎も逃げ回りはしないものの、右翼の脅迫電話やら手紙やらに苦しめられるということがあったり、実際に襲撃を心配するというようなことがあったようだ。

そういうことも関わっているのか、1961年に大江健三郎はほとんど小説を発表していない。もっとも60年の9月から連載を始めた長編小説「遅れてきた青年」に専念していたということかもしれない。ただ、その「遅れてきた青年」も、政治家になるために東京に出てきた青年が、精神的に破滅していくというかなり陰々滅々とした救いのない小説であり、そのあたりこの当時の彼の精神状態が影響しているのかもしれない。

翌1962年の1月に連載が終了した『遅れてきた青年』を刊行した後、再び短編を発表することになるが、この年の小説でもっとも重要なのは『群像』11月号に発表された「叫び声」である。

この小説の後、「性的人間」「日常生活の冒険」と似たようなタイプの青年・少年が登場する小説を書くことになる。

どういうタイプかという、自分が自分であることを確信するために奇矯な行動や表現を行ない、結局自分を滅ぼしていくような少年・青年である。

「叫び声」では、それぞれに精神的に満たされない部分を持った3人の少年・青年が登場するが、そのうちの呉鷹男という在日朝鮮人の青年は初め小説を書こうとし、他の二人の仲間とケンカ別れした後は、女子高校生殺人者になってしまう。

また、この小説で重要なのは、その奇矯な行動者のことを回想し語る友人が出て来る、ということである。「叫び声」では先程の3人の仲間の一人である梅毒妄想になっていた「僕」が死んだ呉鷹男のことを回想している。

この奇矯な行動をする者とそれについて語る者、という組み合わせはこの後の大江健三郎の小説の基本的な形となる。もちろん、それから外れた小説もあるが、数は少ない。「叫び声」から1967年の「万延元年のフットボール」までのこの組み合わせを紹介しておこう。

	奇矯な行動をする者	語り手
「叫び声」	一 呉鷹男	……「僕」
「性的人間」	一 詩を書く少年 (……「J」)	
「日常生活の冒険」	一 齋木犀吉	……小説家「僕」
「万延元年のフットボール」	一 鷹四	……蜜三郎

このような主人公と言えぬ人物とそれについて語っていく語り手＝登場人物という関係は大江健三郎の小説に限ったものではないが、多くの場合、主人公が特別な人間であるのに対して語り手は平凡な人間として設定されていることが多い。ところが、大江健三郎の場合には、語り手も大きな欠落を抱えた独特な人間であるという点で他の小説家の小説と違っている。

このようないわば二人の主人公がいるような設定は、遡ってみると、「遅れてきた青年」が独特な欠落と欲望を持った青年の一人語りという設定であったことについての反省かもしれない。

つまり、共通したところを持ちながら、ずれを持った二人を登場させることで、小説の中に対話性を持たせようとしたのではないか、とも考えられる。(実際に、そううまくいっているかどうかは別)

さて、1962年になってすぐに「日常生活の冒険」の連載が始まり、その連載中に中編「性的人間」が発表される。

この小説には同性愛者であったために、最初の妻を自殺させてしまった「J」と呼ばれる青年が登場する。前半と後半の二つに分れたうち、後半に「厳粛な綱渡り」という詩を書こうとしている少年とその死が、「J」の視点から語られている。結局少年はその詩を書き上げることなく子供をかばって事故死してしまうのだが、彼や呉鷹男と同じように、大江健三郎の小説の奇矯な登場人物たちはみな挫折して死んでいく。しかし、その独特な行動によって、生き残った語り手に強い印象を与えているのだ。

「日常生活の冒険」の主人公齋木犀吉も、様々なことに手を出しては失敗する。結局彼は何一つ成功させずにアフリカで自殺をしたらしいのだが、彼はそのようにして生きることそのもので、自分が置かれている状況を描き出している、ということになる。もう一つ、齋木犀吉の行動を伝えるのは彼の友人で、小説家の「僕」なのだが、この小説は彼の小説家としての成長物語にもなっている。この「僕」の設定は細部を除くと大江健三郎本人を連想させるものになっている。例えば、大学生の時に小説家としてデビューしたとか、自分の書いた小説のせいで右翼に脅迫されるようになるとか、だが、そういう言った出来事に対して、齋木犀吉が「僕」のことを気遣いつつ、同時に批判もする、ということになっている。いわば、「僕」にとって齋木犀吉は時には自分を守り時には背く分身のような存在ということになっている。

この齋木犀吉の設定には複数の大江健三郎自身の友人たちが重ねられているようである。例えば、先程名前を挙げた夫人の兄でもある伊丹十三、それにかつては大江石原と並び称された石原慎太郎、そして大江健三郎の発期から彼を高く評価する評論を書き、その後

は批判者に回った江藤淳などである。

次回は、この斎木犀吉の設定についてももう少し詳しく説明しつつ、今まで述べてきた大江健三郎の小説の基本的な枠組みを具体的に「日常生活の冒険」に即して語っていくことにする。

(前回のまとめ)

前回は、夏休みの前に最後に扱った1959年の「われらの時代」と夏休み明けに扱っていくことになる1963年の「日常生活の冒険」の間の時期のことを年譜を使って説明した。

この時期には、「セヴンティーン」事件で右翼から脅迫されたりという危険にあたりしたが、その一方で、小説においては、自分が自分であることを確信するために奇矯な行動や表現を行ない、結局自分を滅ぼしていくような少年・青年と、その奇矯な行動者のことを回想し語る友人という組み合わせが、1962年の「叫び声」という小説で初めて登場している。奇矯な登場人物たちはみな具体的なものを生み出すことはできずに挫折して死んでいく。しかし、その独特な行動によって、生き残った語り手に強い印象を与え、彼に回想の言葉を発するように促すのだ。

この組み合わせは、この後の大江健三郎の小説の基本的な形となる。もちろん、それから外れた小説もあるが、数は少ない。

このような主人公と言える人物とそれについて語っていく語り手＝登場人物という関係は大江健三郎の小説に限ったものではないが、多くの場合、主人公が特別な人間であるのに対して語り手は平凡な人間として設定されていることが多い。ところが、大江健三郎の場合には、語り手も大きな欠落を抱えた独特な人間であるという点で他の小説家の小説と違っている。そのような共通したところを持ちながら、ずれを持った二人を登場させることで、小説の中に対話性を持たせようとしたのではないかと、とも考えられる。(実際に、そううまくいっているかどうかは別)

さて、「日常生活の冒険」の主人公齋木犀吉も、様々なことに手を出しては失敗する。結局彼は何一つ成功させずにアフリカで自殺をしたらしいのだが、彼はそのようにして生きることもそのもので、自分たちが置かれている状況を描き出している、ということになる。もう一つ、齋木犀吉の行動を伝えるのは彼の友人で、小説家の「ぼく」なのだが、この小説は彼の小説家としての成長物語にもなっている。この「ぼく」の設定は細部を除くと大江健三郎本人を連想させるものになっている。例えば、大学生の時に小説家としてデビューしたとか、自分の書いた小説のせいで右翼に脅迫されるようになるとか、だが、そういう言った出来事に対して、齋木犀吉が「ぼく」のことを気遣いつつ、同時に批判もするという事になっている。いわば、「ぼく」にとって齋木犀吉は時には自分を守り時には背く分身のような存在ということになっている。

この齋木犀吉の設定には複数の大江健三郎自身の友人たちが重ねられているようである。例えば、前回も名前を挙げた夫人の兄でもある伊丹十三、それにかつては大江石原と並び称された石原慎太郎、そして大江健三郎の出発期から彼を高く評価する評論を書き、その後は批判者に回った江藤淳などである。

この当時大江健三郎と同年代の友人にどういう人間がいるかについて、1959年に開かれたシンポジウムに出席した人を紹介しておこう。

(プリント・一人一人紹介)

ここでは、小説家・評論家・音楽家・演劇作家・映画監督などの各界で注目されていた若手が集まっているのだが、齋木犀吉にはそのような当時の大江健三郎の友人たちを取り入れて造形されているところがある。

今回は、この齋木犀吉の設定について詳しく説明しつつ、今述べた大江健三郎の小説の基本的な枠組みを具体的に「日常生活の冒険」に即して語っていくことにする。

先程、齋木犀吉は様々なことに手を出しては失敗する、と述べたが、彼がどういうことをこの小説でしているか簡単に追ってみると……

P13 1956年

スエズ戦争の義勇兵になろうとする—「ぼく」との出会い

(同年10月スエズ運河の権利をめぐる、英仏とイスラエルがエジプトに進軍)

(犀吉18歳・「ぼく」大学2年)

(『厳粛な綱渡り』のP59「徒弟修行中の作家」に書いてある)

……実は大江健三郎はこの年大学3年。細かな違い。他にもP127にあるように、「ぼく」は少年時代に地方都市の感化院に送られてことになっていて、これも大江健三郎と違う。

これは1958年に発表された小説「芽むしり仔撃ち」の主人公の設定で、山の中の村に疎開に行っている間に弟が行方不明になった、というところまで同じ。つまり、大江健三郎に近い「ぼく」がまるで自分の体験を小説にしたように書いている)

P 3 4 1958年(2年後の冬に再会)
ボクサー……(また後でボクシングの話が出てくる)
映画俳優……伊丹十三(大江健三郎の高校時代からの友人であり当時俳優だった)
(または石原裕次郎?)

P 6 9 1960年(2年後)
P 1 0 5 ボクサー金泰のトレーナー
……石原慎太郎の小説「太陽の季節」(プリントで紹介)
P 1 4 3 ポスターや広告のデザイン・本の装丁……伊丹十三
犀吉の父親は劇作家斎木獅子吉……伊丹万作?

(同じ年の数ヶ月後)
P 1 8 8 演劇俳優……伊丹十三
ヨーロッパの前衛演劇を輸入……浅利慶太

P 8 5 「僕」の小説を「自己欺瞞」だと批判……江藤淳(プリントを読む)

最後に「ぼく」と斎木犀吉は袂を分かち
P 2 6 7 → 斎木犀吉の批判に対する彼なりの答えを提示
— 小説を通して自分に向けられた批判に反論?

小説家「ぼく」の成長? 物語としての面を持つ
……ただし、「ぼく」=大江健三郎ではない。

次回は「ぼく」の小説家としての面を追っていき、彼の思考の動きとその後の大江健三郎の小説との関連について説明する。

(前回のまとめ)

前回は、「日常生活の冒険」の主人公斎木犀吉が、どのような人間か、どのようなことを目指して生き、そしてそれらの行動が大江健三郎と同世代の人々をどのように反映しているか、ということの説明をした。

斎木犀吉というキャラクターは、伊丹十三・石原慎太郎といった大江健三郎と同世代の表題者たち・友人たちをモデルにしているのだが、特に大江健三郎の小説を「自己欺瞞」だと批判した江藤淳の影響は大きいだろう。斎木犀吉は、大江健三郎を連想させる小説家の「ぼく」のことを様々な形で批判するが、小説家としての「ぼく」について一番彼が主張するのが「ぼく」が「自己欺瞞」に陥っている、自分で自分をだまして、という批判である。

(P85)「ぼく」の小説を「自己欺瞞」だと批判

前回見たとおり、この批判は、江藤淳が大江健三郎の小説に対して向けた言葉だった。(プリントを読む)

この「自己欺瞞」という言葉は大江健三郎にとってかなり痛烈なまた簡単には受け入れがたい批評だったようで、「日常生活の冒険」だけではなく、同時期の他の小説でも使われている、それらにおいても、主人公が「自己欺瞞」に陥っていると他の登場人物から批判されたり、自分が「自己欺瞞」を行おうとしていると、気づいたりしている。

(プリントを配る)

一つは「日常生活の冒険」連載中に発表された「性的人間」、もう一つは「日常生活の冒険」連載終了後に、書き下ろしの単行本として発表された「個人的な体験」である。まず、4の方のプリントの「性的人間」であるが、前に説明したように、「J」というあだ名で呼ばれている主人公の青年は、「厳粛な綱渡り」という痴漢についての詩を書こうとしている少年と行動をとるようになる。この青年も痴漢をしているのだが、彼と痴漢としての安全組合のようなものを作っている老人とはこの少年を心配し、彼の行動を見続けているのだが、ある日少年は危険な決定的に痴漢になる決心をして彼らの前に現れる。

(プリントを読む)

「性的人間」の初めの方を取った個所では、「ごまかし」という言葉が使われているが、これは「自己欺瞞」をわかりやすく言い換えた言葉だろう。ここで注目したいのは、どういこうことが「ごまかし」つまり「自己欺瞞」ととらえられているか、ということである。ここで老人は、自分と「J」が危険な人間、つまり反社会的な人間になるか、危険ではない人間、つまり社会に順応した人間になるか、という選択肢のどちらかを選ぶように言っている。後を取った個所(3段目以降)では、これとはいくらか違った捉え方ではあるが、やはり「順応主義者」になるということについて「自己欺瞞」という言葉が用いられている。

この2個所についていくつかのずれを無視して、「自己欺瞞」とは自分が本来持っているもの、例えば自分の中にある反社会性から目をそらして、それとは違う生き方、例えば社会に順応した人間として生きる、ということを示しているということになる。

もう一枚のプリントに取ってある「個人的な体験」でも、主人公の「鳥」というあだ名の青年は、本来の自分の望み通りの行動を選んでいることについて「自己欺瞞」という批判を受けている。

「個人的な体験」は有名な小説なので、読んでいる人も多いと思うが、簡単にどういう話か説明すると、この主人公の青年は、自分の生まれたばかりの赤ん坊に知能の障害があることを知り(最後にそれは間違いだった、とわかるのだが)、赤ん坊が衰弱死するのを待ち望んでいる。そして、彼の大学生時代の友人、火見子の家を訪ね、彼女によって慰められている。赤ん坊の様子を見に病院に出かけたものの、まだ赤ん坊が無事であることを知った主人公は火見子の家に戻るが、そこには二人の共通の大学時代の友人である深夜放送のプロデューサーをしている女性が来ていた。

(プリント5を読む)

赤ん坊を死なせたいと思っているにもかかわらず、その希望のままに行動しない、ただ赤ん坊が衰弱死するのを待ち望んでいるだけの青年を、この女性は「自己欺瞞」と言っている。「タフな悪漢か、タフな善人かどちらか」を選ぶべきだった、という言い方もしているが、これは「性的人間」の老人の「危険な痴漢になるか、痴漢であることをやめるか」という言葉と響きあうものである。このような、自分が持っている反社会的な部分に従って生きる

それを押さえこみ社会に順応した人間であるかのようにふるまうか

という選択肢はこれ以後も大江健三郎の小説の中の重要なテーマとなる。

もちろん、この二つの小説と同時期に書かれている「日常生活の冒険」も例外ではない。

ただ、ここで問題になるのは、齋木犀吉の行動を伝える友人の「ぼく」が小説家、という風に設定されていることだろう。

前に話したとおり、「叫び声」以来、自分が自分であることを確信するために奇矯な行動や表現を行ない、結局自分を滅ぼしていくような少年・青年と、その奇矯な行動者のことを回想し語る友人という組み合わせが大江健三郎の小説に見られるようになっていくが、回想し語る人間が小説家、という設定になったのはこの「日常生活の冒険」が初めてである。「日常生活の冒険」以後、この設定によって大江健三郎の小説は、「小説家」という仕事について、また小説を書く、ということそれ自体についての様々な問題にふれるようになっていく。

この話はこれ以後の小説の話へと広がっていくものだが、ここでは「日常生活の冒険」に話を限っておくと、ここでは、小説家という仕事はどういう仕事なのか、という問いが投げかけられている。そして、その問いは先程の、自分が持っている反社会的な部分に従って生きるか、それを押さえこみ社会に順応した人間であるかのようにふるまうか、という問題と結びついていく。

つまり、小説家という職業は反社会的なものなのか、社会に順応したものなのか、というものである。「日常生活の冒険」の登場人物である齋木犀吉は反社会的でなければダメだと考え、友人の「ぼく」を「冒険」に連れ出そうとする。

こういう問いに対して完全な答えがあるはずもないが、小説の後半で「ぼく」は自分なりの答えを出して、小説家として生きることを選んでいく。そのあたりが、前に「日常生活の冒険」に小説家「ぼく」の成長？物語としての面がある、という言ったのはそういうわけであるが、ただし、「ぼく」＝大江健三郎ではない。

これは、「ぼく」の設定と大江健三郎の実際が違っているとかそういうことではない。(確かに、「ぼく」の設定と大江健三郎の間にはいくつかの違いがある。例えば「ナセルが、戦争をしていた冬」に「ぼく」は大学2年生だった、と書いてあるが、大江健三郎は実際は3年生だったり、この小説の中では「ぼく」の祖父が重要な役割を果たすが、大江健三郎の祖父は父方・母方どちらとももっと前に死んでいたり、「ぼく」は感化院に入ったことがあり、また行方不明になった弟がいる、という1958に大江健三郎が発表した「芽むしり仔撃ち」という小説の主人公の設定と重なる体験をしているのだが、大江健三郎は感化院に入ったことはないし、そんな弟も、いない。大きく二つに分けると、小説家としての部分に関しては、「ぼく」は大江健三郎本人に近いが、もっとプライベートなことに関してはあれこれと違った設定になっている)

しかし、ここで「ぼく」≠大江健三郎であることを強調するのは、そういうことを言っているのではなく、小説家は自分をそっくりそのまま登場人物に投影することなどできるわけがないし、それどころか登場人物は小説家以外の人間までも自分の中に取りこんで存在してしまうものである。登場人物はある意味では小説家よりも小さな存在であるし、ある意味では小説家よりも大きな広がりを持った存在である。

だから、「ぼく」の出した答えがそのまま大江健三郎本人が行き着いた、彼の信じる答えである、と考える理由は全くないが、小説を書くということについて、また小説家という仕事について、一つの考え方が提示されているのは確かである。

このような小説を書くことはおそらく江藤淳が大江健三郎の小説家としてのあり方を「自己欺瞞」として批判したことに対する反論になっているはずであり、小説家大江健三郎が小説を通して示した一つの、あくまでも一つののだが、回答だと言えるだろう。

では、「ぼく」は小説家という仕事について、初めどのような見方をしていたのか、そしてそれがどのように変わっていったのか、ということを見ていこう。

最初に齋木犀吉に会った時、既に「ぼく」は小説を書きたいという希望を持っていた。ただ、それはP25に「一」とあるように、こういう「文体」の小説を書きたい、という夢想でしかない。まだ、彼は小説を書くとはどういうことなのか、小説家とはどういう職業なのか、ということについては全く考えていない。

その後、P51にあるように、彼は大江健三郎と同じように大学新聞に載せた小説がきっかけとなってデビューをする(その小説の内容など、ここでも大江健三郎本人に近づけようとしている)。そして、P67にあるように「政治的な残酷物語」によって「脅迫の電話やら手紙やら」が「ぼく」を脅かすようになる。そこで、先程重要な役割を果たすと述べた「ぼく」の祖父が次のような言葉を「ぼく」に伝える。P68

「小説家の職業」……「旅に出るほうの血」／「家にのこって道を眺めているほうの血」この言い方は、P13から15にあるように、「ぼく」の家系には、危険な生き方を選ぶ「政治的人間」・「冒険家」／「冒険」に出なかった生き残りたち、

という二種類の間がいた、ということを示している。この、家系の中にある二種類の血、という設定は1967年の「万延元年のフットボール」に引き継がれ、蜜三郎と鷹四という二人の兄弟を縛っていくのだが、ここでの話に戻ると、これは、前に説明した自分が持っている反社会的な部分に従って生きるそれを押さえこみ社会に順応した人間であるかのようにふるまうという二者択一のバリエーションの一つである。ここで祖父は自分の意見をはっきりとはいっていないが、話の流れからは二通りの考え方ができる。一つは、小説家というのは「旅に出るほうの血」に属するものと考えていて、だから、小説家という職業の危険性をわきまえていなかった「ぼく」を批判している、というもの、もう一つは「家にのこっているほうの血」に属するものと考えていて、にもかかわらず危険なことをしてしまった「ぼく」を批判しているというものである。ただ、ここは、これだけではどちらとも決められないように書いているのだろう。

これに対して、斎木犀吉ははっきり小説家としての「ぼく」には「冒険」が必要だと語っている。P 86・87
「冒険的な日常生活」←→「自己欺瞞」
実際、「ぼく」は斎木犀吉によって「冒険」へと連れ出される。

ここまで見てきたように、1960年代の半ばまでの大江健三郎の小説では、「日常生活の冒険」の中の言い回しを使うと「旅に出るほうの血」／「家にのこって道を眺めているほうの血」という二項対立が出て来るが、このような発想がどこから来ているか、を確認しておこう。

この発想の元には、まずサルトルの社会参加の文学、という考え方があろう。
アンガージュマン engagement (義務を果たす)
文学者は知識人としての責任を果たすために、社会に参加しなければならない、そしてその社会参加によって、彼の作り出す作品のリアリティが保証される、という考え方。
アンガージュマンする／しない(書齋に閉じこもる)
さらに、前にあげたジャック・ケルアックの「路上」もこれにはかかわっている。「路上」はまさに旅をする、常に道の上にいる生活を描いた小説であり、常識的な定住生活に対して、常に移動し続ける冒険の生活のすばらしさが語られていた。
('ぼく'は斎木犀吉との冒険生活のためにアームストロングというアメリカ車を手に入れるが、これは自動車でアメリカ中を走り回る「路上」を連想させるところである。「われらの時代」の南滋の大型トレーラーで日本中を演奏旅行する、という夢想と響き合っている。
さらに、大江健三郎にかかわりのある作家ということであると、ケルアックと同じアメリカの小説家ノーマン・メイラーの名前もあげなくてはならない。ノーマン・メイラーは、人間をヒップとスクエア、つまり進歩的かつ反社会的な人間と保守的な社会に順応した人間に分けた。hipster / square
ヒップからヒッピーという言葉ができたし、今でも保守的でまともな人をスクエアという風に言うようだ。

さて、「冒険」の生活の後、最後に「ぼく」と斎木犀吉は袂を分かつのだが、この二項対立について、「ぼく」はどういう答えを出したのだろうか？
P 267 → 斎木犀吉の批判に対する彼なりの答えを提示

小説家がどういう職業かということの答えは、小説家として生きていく中でしか見つからない。……生の実践

この問いと答えは先程名前をあげた「万延元年のフットボール」で形を変えて繰り返される。そこでは、斎木犀吉と「ぼく」以上に明確に対立した二人が自分たちの生き方を巡って対立している。
次回からは「万延元年のフットボール」を扱うので、その文庫本を用意してもらいたい。

(前回のまとめ)

前回は、江藤淳が大江健三郎を批判するのに用いた「自己欺瞞」という言葉が、大江健三郎の1960年代前半の「日常生活の冒険」「性的人間」「個人的な体験」といった中編・長編小説に取りこまれ、小説の中の大きなテーマへと結びついている、という話をした。そのテーマとは、反社会的な人間／社会に順応した人間二項対立・二者択一である。「日常生活の冒険」では、小説家という職業がこの二項対立のうちのどちらに属するのか？ということが、語り手の小説家「ぼく」に関するストーリーにおいて重要な意味を持っていた。

小説の中の言葉で言うと「旅に出るほうの血」／「家にのこって道を眺めているほうの血」のうちのどちらか、ということになる。

「ぼく」の友人齋木犀吉は、彼を反社会的な人間の側に連れ出そうとして、様々な「日常生活の冒険」に彼を誘う。

P86・87 「冒険的な日常生活」←→「自己欺瞞」

そして、「ぼく」も彼に従って、小説を書くことをしばらくの間休むことになる。

今回はまず、ここまで見てきたような、「日常生活の冒険」の中の言葉で言う

「旅に出るほうの血」／「家にのこって道を眺めているほうの血」

という二項対立のような発想がどこから来ているか、ということから始めよう。

この発想の元には、まずJ・P・サルトルの社会参加の文学、という考え方があるだろう。

アンガージュマン engagement (義務を果たす)

文学者は知識人としての責任を果たすために、社会に参加しなければならない、そしてその社会参加によって、彼の作り出す作品のリアリティが保証される、という考え方。

アンガージュマンする／しない(書齋に閉じこもる)

そして、この場合のアンガージュマンとは、ほとんど現在の社会に対して異議申し立てを行う、社会批判・社会変革、左翼の文脈で言うと革命の先頭に立つ、ということの意味する。つまり、社会を肯定し順応するのではなく、反社会的な立場に立つことをも厭わない、そういう立場をとることを言うのである。

例えば、サルトルはフランス政府のアルジェリア植民地に対する政策を批判したし、社会的な権威となっているノーベル文学賞の受賞を拒否した。

さらに、前にあげたジャック・ケルアックの「路上」もこれにはかかわっている。「路上」はまさに旅をする、常に道の上にいる生活を描いた小説であり、常識的な定住生活に対して、常に移動し続ける冒険の生活のすばらしさが語られていた。

(「ぼく」は齋木犀吉との冒険生活のためにアームストロングというアメリカ車を手に入れるが(p151)、これは「われらの時代」の登場人物南滋が大型トラックで日本中を演奏旅行をして回ることを熱望していたのを連想させるものであり、同時に「われらの時代」と同じように、自動車でアメリカ中を実際に走り回るジャック・ケルアックの「路上」を連想させるところである。もっとも、結局このアームストロングを駆っての日本一周旅行、というのもまた実行されずに終わってしまう。そのあたりでも、「日常生活の冒険」はやはり齋木犀吉という、様々な才能を持ちながら結局何もなしとげることがなかった男を主人公にしている小説であることがわかる。先程読んだシーンは、だから一時の幸福な夢、とでもいうようなものとして書かれていたのである。

もう一人、この二項対立について、大江健三郎にかかわりのある作家ということであると、ケルアックと同じアメリカの小説家ノーマン・メイラーの名前もあげなくてはならない。

『厳粛な綱渡り』には「反逆的なモラリスト・ノーマン・メイラー」というエッセイが載っているが、大江健三郎は「鹿の園」The deer parkという小説の名前と『僕自身のための広告』The advertisement for myselfというエッセイ集の名前を挙げているが、『厳粛な綱渡り』というエッセイ集の構成なども実はこのノーマン・メイラーのエッセイ集を真似したものである。

このノーマン・メイラーは、人間をヒップとスクエア、つまり進歩的かつ反社会的な人間と保守的な社会に順応した人間に分けた。hipster / square

ヒップからヒッピー(hippei,hippy)という言葉ができたし、今でも保守的でまともな人をスクエアという風に言うようだ。

このようにいくらか意味・使い方は違うものの、反社会的な人間(「ヒーロー」／社会に順応した人間(「反・ヒーロー」)という二項対立は大江健三郎を取り囲む様々な文学者の書くものに現れており、それらから刺激を受ける形で大江健三郎はこれを自分の小説の中でテーマにしていった、ということになる。

さて、何もなしとげることがなかった「冒険」の生活の後、最後に「ぼく」と齋木犀吉は袂を分かつのだが、この二項対立について、「ぼく」はどのような答えを出したのだろうか？

こういう問いに対して完全な答えがあるはずもないが、小説の後半で「ぼく」は自分なりの答えを出して、小説家として生きることを選んでいく。
P 266～267・268→祖父および齋木犀吉の批判に対する彼なりの答えを提示
小説家がどういう職業かということの答えは、「小説家の職業をつづけるそのあいまいで困難な生涯のすべての努力をつうじて」しか見つからない。……生の実践
そして p 269 で齋木犀吉の「懇願」を拒絶する。

この問いと答えは前回名前をあげておいた「万延元年のフットボール」で形を変えて繰り返される。そこでは、齋木犀吉と「ぼく」以上に明確に対立した二人
根所蜜三郎／鷹四の兄弟
が自分たちの生き方を巡って対立している。

例えば、この問題は次のような形で提示されている。 p 170～171
「非業の死を遂げた」人間／「安穩にゆったりと長生きした」人間
「社会に受けいれられている人間」

最後の蜜三郎の言葉→鷹四を挑発—自分が「典型」であることを蜜三郎に納得させようとし始める。

お互いに相手を挑発し、相手の言葉に挑発されながら、自分を「典型」にしようとする二人

↓ ↓
曾祖父／曾祖父の弟（幕末・明治初め—「万延元年」）
この曾祖父と曾祖父の弟という兄弟がどのような人間だったのか、どのように生きたのか、という解釈、歴史のとらえ方が現在の蜜三郎／鷹四の兄弟の関係を動揺させることになる。
（この小説については発表当時から、蜜三郎／鷹四をそれぞれ認識者／行動者・文学的人間／政治的人間といった固定した枠に収めてしまっていて読む批評が多かったのだが、お互いに挑発し合う二人の関係や、曾祖父とその弟を巡る様々な解釈のダイナミズムをとらえないと、きちんと小説として読んだことにはならない。）

歴史・過去の解釈・意味づけについて

詳しくは次回。

(前回のまとめ)

(前回で「日常生活の冒険」の話が終わり、今回から「万延元年のフットボール」を数回かけて読んでいくことにする。ただ、「日常生活の冒険」や同時期に見られた)反社会的な人間／社会に順応した人間(という二項対立・二者択一は「万延元年のフットボール」にも引き継がれている。前回説明したように)根所蜜三郎／鷹四の兄弟がこの二項対立の中で様々な葛藤・ドラマを産み出していく。

(前回読んだp170～171のところにあったように、「万延元年のフットボール」では、この二項対立は、次のような言い方で表現されている。)

↓ ↓
「安穩にゆったりと長生きした」人間／「非業の死を遂げた」人間
「社会に受け入れられている人間」

↓ ↓
曾祖父／曾祖父の弟(幕末・明治初め—「万延元年」)

(この曾祖父と曾祖父の弟という兄弟がどのような人間だったのか、どのように生きたのか、という解釈、歴史のとらえ方が現在の蜜三郎／鷹四の兄弟の関係を動揺させることになる。

この小説については発表当時から、蜜三郎／鷹四をそれぞれ認識者／行動者・文学的人間／政治的人間といった固定した枠に収めてしまっていて読む批評が多かったのだが、お互いに挑発し合う二人の関係や、曾祖父とその弟を巡る様々な解釈のダイナミズムをとらえないと、きちんと小説として読んだことにはならない。)

(この過去の解釈、ということは同時に次の問題にも関わっている)

長編小説の方法—どのように長さを持続するか。

「われらの時代」—視点人物を複数設定する・登場人物の数を増やす・小説内の空間を広げる(時間は限定)

「日常生活の冒険」—(視点人物は一人)登場人物増・小説の空間を広げ(正確にはわからないが、おそらくとびとびに7、8年間)、時間を長くする。(東京、四国、パリ、ロンドンが舞台になる)

「万延元年のフットボール」—(視点人物は一人)登場人物増・小説の時間(これも正確にはわからないが、全体で半年くらい。中心になっている蜜三郎が四国の谷間の村に入ってから鷹四が自殺するまではおそらく一ヶ月もない)と空間(東京の蜜三郎の家・羽田空港・四国の谷間の村)は制限しているが、過去の時間(を伝える言葉)を導入している。

(それでは、蜜三郎／鷹四の兄弟と祖父と曾祖父にかかわる歴史・過去はどのような関係にあるのか?)

(小説の冒頭 P7 読み手を試すような書き出し)

蜜三郎(「蜜」と呼ばれている)—「期待」の感覚をもとめている翻訳家

なぜ「期待」が失われたのか……

・植物のような子供の誕生(P18→7～)

・友人の自殺—(P11→1～)精神療養所から出た一年後(P15→1～)=初期の大江健三郎の小説の世界「他人の足」他

(P33→1～P36)何かを抱えこんでいる登場人物たち

「頭のなかの結び目」「あるもの」

妻菜摘子—同じ二つの出来事によって酒に溺れている

(もう一人の主人公である鷹四は蜜三郎と対極的な人間と小説の中で見なされているし、今までの研究論文や文芸評論でもそう読まれてきたが、実際は今読んだところに現れているように、二人は自殺した友人を介して結ばれ、共通したものを有している)

鷹四(「鷹」と呼ばれている)—「本当の事」・「新生活」を始めようとしている(P64→3～65→6)

彼の過去には何があったのか

・妹の自殺?

このような蜜三郎・鷹四の兄弟と菜摘子が二人の故郷である四国の谷間の村に戻ってい

く。そこで彼らを待っていたのは、壊れかかった村の共同体と村に伝わる一揆の伝承だった。それらに関わりながら、彼らは自らの抱えこんだものを見つめ直すことになる。次回は、一揆の伝承と二人の関係について、また一揆の伝承と現在の村の共同体のあり方について述べていく。

(前回のまとめ)

前回は「万延元年のフットボール」について、そのタイトルの理由や、二人の主人公のうち兄の蜜三郎について彼が陥っている精神状態について説明した。「万延元年のフットボール」では、1960年代初頭の現代を生きる蜜三郎／鷹四の兄弟と彼らの回りの人々について書かれているだけではなく、100年前の1860年つまり万延元年に生きていた彼らの曾祖父とその弟についても書かれている。つまり、過去の時間を導入することで、長編小説としての長さを作り出しているわけだし、1860年の百姓一揆と1960年の六十年安保闘争、という二つの民衆のエネルギーの発露・表現となっている出来事を結びつける、というモチーフも持っている。その中で、1860年において支配者であった曾祖父と百姓一揆の指導者だった曾祖父の弟の生き方をそれぞれどうとらえるか、1960年を生きる蜜三郎と鷹四の兄弟が争う、ということになっている。

1860年(万延元年) 四国の谷間の村(大窪村) 1960年
曾祖父(村の支配者) 一社会に順応? 一蜜三郎(学者・翻訳家)(p66)
曾祖父の弟(一揆の指導者) 一反社会的? 一鷹四(60年安保に参加)(p46)
(実際の大江健三郎の出身地は大瀬村)

大江健三郎は、「万延元年のフットボール」の発表後、もともとこの小説は「歴史小説」として構想されたものだ、とか、この小説の主人公は曾祖父の弟だ、というようなことを講演で発言している。小説を書いた後の発言であるし、大体小説家というのは嘘つきなので、この話自体は眉につばをつけて聞いた方がいいものである。ただ、大江健三郎がこういう発言をする理由というのも見当がつく。どういうことかという、発表されてからかなり最近にいたるまで、「万延元年のフットボール」は蜜三郎と鷹四の兄弟(その中でも特に鷹四)を中心に論じられているだけで、この現代を舞台にした小説に100年前の出来事、百姓一揆についての言葉が取り入れられているのはどういうことなのか、という点については誰も述べてこなかった、という事情があるのである。そこで、私は前に、「万延元年のフットボール」における百姓一揆および蜜三郎／鷹四の曾祖父／曾祖父の弟についての伝承・噂話・歴史的な学説について整理して、それぞれについて、それが現在に生きる蜜三郎／鷹四の兄弟にとってどういう意味を持っていたか、について述べたものを書いたことがある。今日はそのあたりの話を中心にするつもりである。

前回話した通り、他の登場人物から「蜜」と呼ばれている蜜三郎は、植物のような脳に障害がある、「重傷の精神障害児」(p63)の子供が誕生して、その子供を養護施設に預けることになったり、自分とよく似たタイプの友人が自殺したために、「期待」の感覚を失ってしまった翻訳家だった。この友人はなぜ自殺したのが、何が彼を自殺へと追いこんだのか、ということを蜜三郎は考え続けている。

(P33→1～P36)何かを抱えこんでいる登場人物たち

「頭のなかの結び目」「あるもの」

妻菜摘子一同じ二つの出来事によって酒に溺れている

(もう一人の主人公である鷹四は蜜三郎と対極的な人間と小説の中で見なされているし、今までの研究論文や文芸評論でもそう読まれてきたが、実際は今読んだところに現れているように、二人は自殺した友人を介して結ばれ、共通したものを有している)

鷹四(「鷹」と呼ばれている)(P63→1～65→6) — 「本当の事」・「新生活」を始めようとしている

彼の過去には何があったのか

・妹の自殺?

このような蜜三郎・鷹四の兄弟と菜摘子が二人の故郷である四国の谷間の村に戻っていく。そこで彼らを待っていたのは、壊れかかった村の共同体と村に伝わる一揆の伝承だった。それらに関わりながら、彼らは自らの抱えこんだものを見つめ直すことになる。この一揆の伝承が様々な形で、ずれを持ちながら様々な場面で出て来ることになる。これらの百姓一揆の伝承を整理したものをプリントにしたので、それを元に話をすることにする。

(プリント配る→説明)

「万延元年のフットボール」 大窪村の百姓一揆の伝承について（プリント）

時間順（「章番号」、講談社文芸文庫の頁数）

小説の時間が始まる前（回想部分）

- ① 戦争が始まった年の秋の学芸会の芝居。（「5」、一六一～一六四頁）
曾祖父が農民たちの前で、一揆の指導者である弟の首をはねる。
- ② 祖母の根所家の祖先の才覚を語る自慢話。（「6」、一九五頁）
曾祖父は倉屋敷にたてこもる一揆の〈若者組〉を策略にかけて役人に引き渡し斬殺させた。
- ③ 戦時中に母親が蜜三郎に語った話。（「6」、一七八頁）
一揆は谷間の欲深な百姓たちが起こしたものであり、それを指導した曾祖父の弟は自分の家を壊した「気狂い」である。それに対して曾祖父は倉屋敷に立て籠もって抵抗した「立派な方」である。
- ④ 戦後まもなく鷹四と蜜三郎がそれぞれ聞いた対極的な二つの村の噂。（「2」、七一頁・七三頁）
曾祖父が弟を殺し、自分が一揆にかかわっていないのを証明するために弟の腿の肉を食べた（鷹四）。
実は曾祖父は弟が高知へ逃げるのを援助し、弟は東京に出て偉い人になった（蜜三郎）。
- ⑤ 戦後社会科の時間に蜜三郎が聞いた教師の話。（「6」、一七七頁）
一揆の時の百姓たちの武器は大竹藪から伐り出した竹槍であった。
- ⑥ 鷹四が伯父の家に引き取られている間に作った「貴種流離譚」。（「12」、三九〇頁）
鷹四は曾祖父とその弟以来の自分の家系に拡大した誇りを抱き、妹に自分たちは選ばれた特別な二人だと教えこんだ。
- ⑦ 蜜三郎が東京で最初の翻訳を出した頃に届いた、もと教員・郷土史家の手紙。（「5」、九九・「6」、一七九～一八〇頁）
曾祖父が弟を高知へ逃がしたという意見の方が正しいと述べ、万延元年前後の愛媛全域の様ざまな一揆を総合するベクトルが維新を指していたことを科学的態度で強調。
小説の時間が始まった後（現在時点）
- ⑧ 蜜三郎と菜摘子が谷間に着いた翌日の、倉屋敷をめぐる蜜三郎と鷹四の対立。（「4」、一一四～一一六頁）
倉屋敷を建てた「深慮遠謀の、保守派の」曾祖父を嫌悪する鷹四と、兄の方が時代の前方を見ていたと主張する蜜三郎。
- ⑨ 根所家の二つの「タイプ」について鷹四が語る。（「5」、一七一頁）
非業の死を遂げた人々と安穩にゆったりと長生きした人々の二つに分け、蜜三郎を曾祖父と同じ後者の系譜に属するとからかう。
- ⑩ 蜜三郎が聞いた住職の説。（「6」、一九一～一九七頁）
曾祖父は村の暴力的なエネルギーにはけ口を与えるため、一揆を城下町に向かわせるよう画策していた。そのための指導者グループとして弟の下の〈若者組〉が選ばれ、弟は自分だけが高知へ逃げこむという密約をかわしていた。
- ⑪ 蜜三郎が菜摘子に盂蘭盆会の念仏踊りについて語る。（「7」、二〇七～二一一頁）
谷間で非業の死を遂げた人間がなる『御霊』の中心人物は曾祖父の弟である。
- ⑫ 鷹四が合宿で一揆の〈若者組〉についてフットボール・チームのメンバーに語る。（「8」、二四六～二五六頁）
〈若者組〉は一揆における暴力的なヒーローで強く団結していた。一揆の後、村人たちは厄介者になった彼らを裏切った。
- ⑬ 蜜三郎が読む曾祖父の弟が村の外から送ってきた五通の手紙、およびその引用。（「11」、三三四～三三九頁）

曾祖父の弟は様々な冒険をし、自由民権の「闘志」を抱いたりするが、最後の手紙は孤独な初老の人間の面影を浮かび上がらせている。

⑭ 倉屋敷に地下倉が発見されたことと、祖父の書いた『大窪村農民騒動始末』（引用あり）の二つから最後に蜜三郎が考え、住職に語った「啓示」。（「13」、四二二～四二四頁・四二八～四三五頁）

曾祖父の弟は仲間たちを斬首させた自分を罰するために地下倉に閉じこもり、自分が村の外へ脱出したとしたら出していただろう手紙を想像して書いていた。そして明治四年の血税一揆にあたってはひそかに正体不明の指導者として、第二の一揆を成功に導いた。

次回は、これらの一揆についての伝承が蜜三郎と鷹四の二人の兄弟の間にどのような葛藤・ドラマを作り出しているか、という話をする。一週間間が空くので、できれば、まだ読んでおいてもらいたい。

(前回のまとめ)

前回は、「万延元年のフットボール」という小説が1960年頃の現代と1860年代の過去・歴史を結びつける、というモチーフ・方法を持っている、ということの説明した。その二つを結びつけているのが、蜜三郎と鷹四の根所家の二人の兄弟である。この二人が彼らの曾祖父と曾祖父の弟、つまり根所家の先祖が万延元年つまり1860年に村で起きた百姓一揆でどのような役割を果たし、また百姓一揆の後どのように生きてたか、ということをめぐる争う。

なぜ、たとえ先祖のこととは言え、彼らが100年も前のことで争うのか。

実際、他の登場人物もそのことについての疑問を述べたりもしている。

(P116L6 プリント⑧倉屋敷での蜜三郎と鷹四の間の言い争いの後の菜摘子の疑問)

(歴史は歴史そのものとしてではなく、現在に生きている人間にとって何らかの意味を持つからこそ、様々な形で語られる。もしくは語られることで、現在生きているわれわれ、現代の人間にとって意味のあるものとしてかかわってくる。)

歴史的な出来事は絶対に無色透明な中立なものとしては語られない

→本人が意識しているかいないかに関係なく語る人間が持つイデオロギー(思考の制度性)によって染められている……新歴史主義(ニューヒストリシズム)・文化研究(カルチュラル・スタディーズ)

「万延元年のフットボール」は小説としてこういう考え方を先取りした、または同時代的に同じ立場から歴史に関係のある小説を書いている。

前回配ったプリントは、「万延元年のフットボール」の中でどういう形でどのような万延元年の百姓一揆についての伝承が語られているか、というのをまとめたものである。

上段の方は、この小説で描かれている時間の前に、蜜三郎や鷹四がかかわったものであり、下段の方は「1死者にみちびかれて」以降の時間に出て来るものである。前回は上段の下方だけを説明したが、二週間ぶりなので、もう一度確認しておこう。

先程のあらゆる歴史について記述はイデオロギーをまもっている、という話をしたが、それは、⑦のような根所家と関係はない郷土史家の手紙にも言えることである。彼は歴史、科学的に、一人一人の人間よりも大きな歴史の流れ、大きな社会的または経済的条から見なければならぬ、という立場から語っている。これはまさにこの時代における歴史学の主流だったマルクスの主義イデオロギーに則った語り方である。

この⑦は昔からの意味でのイデオロギーが関係していたが、①②④は、最近用いられている広い意味での思考の制度、という意味でのイデオロギーが現れている。つまり、大窪村の庄屋・大地主であり、村の経済的かつ社会的な支配者である根所家についての村人たちの畏敬の念と、それに対する根所家の人間の自尊心の現れである。

その自尊心は、伯父の家と妹と一緒に引き取られた後の、劣等感と共に生きていた鷹四が作り出した⑥の「貴種流離譚」にも見られる。「貴種流離譚」というのは、王や王子や貴族といる身分の高い人間が、身分を失って一般人・庶民の中に埋もれて、さまよう、生活を折るが、後に再び本来の身分に戻る、または戻れず死んでいく、というもので、もともと折口信夫という学者がヤマケルの伝説について説明するために使った言葉であり、引き取られていたという立場からいつか離れることを望んで考え出した解釈である。

ここ前回注意を促したのは、この時点での鷹四は曾祖父とその弟の二人の両方について「誇り」を抱いていた、ということである。

この点のどこが問題か、というと、これはこの「万延元年のフットボール」という小説の語り手である蜜三郎のとらえ方とずれているから、である。

先程見た(P116L6)の菜摘子と鷹四のやりとりの前に次のような蜜三郎の自分と鷹四についての感想が書かれている。

この感想は、プリント⑧の曾祖父とその弟を巡るやりとりの後に書かれているが、そのやりとりは次のようなものである。(P114→4~)

ここでは、曾祖父と曾祖父の弟のうちどちらが時代の変化を見ていた革新的な人間だったか、また曾祖父というものは「深慮遠謀」の保守的な人間だったのか、ということをめぐる争いが争っている。それを聞いていた菜摘子は、最初に言ったような疑問を述べるのだが、これは100年前のことが問題になっているのではなく、現代を生きている蜜三郎と鷹四の兄弟がどういう人間なのか、ということが問題になっているのである。

そして、ここで蜜三郎は鷹四が子供の頃から現在まで一貫して曾祖父の弟に感情移入をしてきたような言い方をしている。

しかし、既に見たように、鷹四はかつては曾祖父の弟と同じように曾祖父のことを誇りにしていたのであり、それがいつのまにか曾祖父のことを「深慮遠謀」として嫌悪するようになっていっている、これはどういうことなのか。ここでは、特に「深慮遠謀」という言

葉に注意しておこる。なぜ「深慮遠謀」であるというところが軽蔑の対象になるのか？
この点を明らかにする。この点については別の点だが、それは語り手蜜三郎の意地の悪さを見方傾いて今読んだ個所にもそれは現れている。
「万延元年のフットボール」のような登場人物が語り手になっている小説に限らず、小説の語り手がどのような立場でどのよう語っているのか、ということに注意しなくてはならない。先程のニュ・ヒストリシズムやカルチュアル・スタディーズのことを思い出し、蜜三郎は鷹四の自分に対する対抗意識を強調するように語っているが、それを伝える蜜三郎の語り方自体が鷹四への対抗意識に染められているのである。
「万延元年のフットボール」という小説は、無色透明の客観的な語り、などというものは存在しない、という見方に立ち、予め語り手である登場人物に偏見を持たせ、その偏見をストーリーの中で壊していくことで小説が一人の語り手のモノローグとなってしまうことを避けようとしている。
小説が一人の登場人物のモノローグ（独白）として読まれてしまうという「われらの時代」以来の問題の一つの解決法として、蜜三郎という独特な語り手を設定したのである。
実は「万延元年のフットボール」では予め蜜三郎という語り手の特殊性が彼自身の言葉によって伝えられている。もちろんその特殊性も彼自身が語るものである以上、何らかの歪みを持った自己イメージであることはいうまでもない。

(P 8 → 5 ~ P 9)
ここで突然「あなた」という風に出て来るが、これは誰か具体的な小説の登場人物ではなく、読み手に向けた言葉と考えられる。つまり、今これを読んでいるわれわれが「あなた」なのである。そして、ここで「あなた」は蜜三郎の置かれた状況、具体的には右目に視力がない、ということから距離を置いた人間として位置づけられることになる。つまり、右目を覆わなければ蜜三郎と同じ立場には立てない、つまり右目に視力がある人間にされてしまうのである。実際に、読み手が右目なり左目なりの視力を失った人間である、かどうかはここでは問題ではなく、「あなた」と呼びかけられとたんに、蜜三郎の遠く離れた場所にはじき出されてしまうのである。
もちろん、ここで語られているのは、蜜三郎の自己イメージであり、他の人間から見て蜜三郎が彼自身が考えているように見えるとは限らない。実際、彼の鷹四に対するイメージに偏見が含まれているように、自己イメージがゆがんだものである可能性はある。
そのあたりの点はこれから明らかにしていくつもりだが、まずはプリントに戻って残りの一揆の伝承について確認しておこう。
(プリントを使う)

次回は今回指摘したこの小説についてのいくつかの疑問点を明らかにし、同時に蜜三郎の語り方が持っている偏り・歪み、それを伝えるためにこの小説が持っている仕掛けについて説明することにする。

(前回のまとめ)

前回、「万延元年のフットボール」という小説が、最近の歴史研究・社会研究の主流となっている、新歴史主義（ニューヒストリシズム）または文化研究（カルチュラル・スタディーズ）の基本的な考え方、つまり歴史的な出来事は絶対に無色透明な中立なものとしては語られず、語る人間が持っているイデオロギー（思考の制度性）によって染められているという考え方を先取りしたものである、ということの説明し、前に配ったプリントにまとめておいた、この小説の舞台となっている大窪村で万延元年に起きた一揆の伝承について、それぞれがどのようなイデオロギーの元で語られているか、ということの説明した。そして、蜜三郎の語る言葉を通してわれわれ読み手に伝えられる様々な一揆の伝承が、それを学芸会の芝居にしたり、噂話として伝えてきた人々が持つ思考の制度に染められているだけではなく、語り手である蜜三郎の持つイデオロギー、偏見によって歪められている、ということ指摘した。前回の最後の方で、文庫本のP114→4～116L3にあるように、蜜三郎が鷹四に対して意地の悪い視線を向けているということが確認できる。また、125頁では、彼らの兄の死を巡って鷹四の記憶違いを修正する際にことさら自分を正当化する、または恩着せがましい言い方をしている。先程読んだ個所で、蜜三郎は鷹四が「曾祖父の弟にヒロイックな抵抗者の後背をせおわせたりする」という言い方をしていたが、それは子供の頃から兄として自分を押しこめようとしている兄に対して抵抗する自分自身と、同じ村の権威である兄（つまり曾祖父）に対して抵抗する曾祖父の弟を重ねていたということだろう。このような弟に対して優位に立とうとする蜜三郎の傾向は子供の頃からのものだったのかもしれないが、その一方でプリントの④にあるように、彼は弟の不安を解消しようという気持ちも持っていた。それに比べると現在の蜜三郎はもってこい容赦なく鷹四を批判し、最後には自殺へと追いやるのだが、その変化はどのようにして起こったものなのだろうか。今回はそのあたりについて述べたい。

前回も一つ、ここで蜜三郎は鷹四が子供の頃から現在まで一貫して曾祖父の弟に感情移入をしてきた、ような言い方をしているが、プリントの上段の⑥にあるように、鷹四はかまわず曾祖父の弟と同じように曾祖父のことを誇りにしていたのであり、それがいつのまにか曾祖父のことを「深慮遠謀」として嫌悪するようになる、という変化に蜜三郎は気づいていない、ということも述べた。鷹四の曾祖父嫌悪については、これ以外の個所、例えば文庫本のP73L7でも、（夢の中で、自殺した友人や養護施設にいる白痴の赤ん坊に向かって「僕がきみたちを見捨てた」と叫んだ（現実でも寝ながら叫んだようなのだが））蜜三郎に対して、鷹四は次のように言っている。つまり、妹の死後の鷹四は、曾祖父のことを「ほかの人間に本当に酷いことをするタイプ」として、また前回重要だと言ったことを繰り返せば、「深慮遠謀」をする人間として嫌悪されている、ことになる。

この鷹四の変化についてはまた別の機会にふれることにして、今回は語り手である蜜三郎について、特に彼の語りを持つ思考・感覚の制度について見ていくことにする。

残りの回数もほとんど無くなってきたが、この授業は、大江健三郎という小説家がどのように変わっていったか、特に独特な感覚的な描写が特徴だった短編小説から出発した大江健三郎が、どのように長編小説を中心として仕事をするような小説家へと変わっていったのか、ということを追っていつている。大江健三郎が長編小説を書き始めた時の課題となっていたのが（これは失敗した小説や、小説の批評からそう判断できるのだが）、一つは長編小説の長さやストーリーを持続させつつ、表現の密度を落とさないようにするということ、前にも名前を挙げた「夜よゆるやかに歩め」はその点で、短編小説をただ長く引き伸ばしただけで、彼独特の表現が殺されてしまっていた。もう一つは、小説が一人の登場人物、特に視点人物のモノログ（独白）として読まれてしまうことを避ける、ということだった。視点人物を限定する、というのは、大江健三郎が小説を書く上での選んだ方法なのだが、そうすると例えば「われらの時代」のように、小説が視点人物を通じた小説家本人のモノログとして読まれてしまうことになる。実際、「われらの時代」はモノログではなく、読み手、つまり批評家の側の問題というものもあるのだが、それはともあれ、視点人物をいかに相対化するか、

ということは大江健三郎に限らず多くの小説家にとっての課題でもある。これらの問題の解決法として、まずストーリーを引っ張っていく登場人物を作り、もう一人彼の行動を追いかけ、言葉にして語る役割を担う登場人物を設定する、というのが大江健三郎の方法だった、ということはお話したが、「万延元年のフットボール」鷹四と蜜三郎の兄弟にその役割をわりふっている。さらに、この小説では蜜三郎という独特な語り手を設定したのである。

実は「万延元年のフットボール」では予め蜜三郎という語り手の特殊性が彼自身の言葉によって伝えられている。もちろんその特殊性も彼自身が語るものである以上、何らかの歪みを持った自己イメージであることはいうまでもない。

(P 8→5～P 9)
このような形で突然何の理由もなしに蜜三郎が片目の視力を失ってしまった、ということが彼におよぼした影響については、次回鷹四との関係の中で述べる。ここで突然「あなた」という風に出て来るが、これは誰か具体的な小説の登場人物ではなく、読み手に向けた言葉と考えられる。つまり、今これを読んでいるわれわれが「あなた」なのである。そして、ここで「あなた」は蜜三郎の置かれた状況、具体的には右目に視力がない、ということから距離を置いた人間として位置づけられることになる。つまり、右目を覆わなければ蜜三郎と同じ立場には立てない、つまり右目に視力がある人間にされてしまうのである。実際に、読み手が右目なり左目なりの視力を失った人間である、かどうかはここでは問題ではなく、「あなた」と呼びかけられとたんに、蜜三郎の遠く離れた場所にはじき出されてしまうのである。

もちろん、ここで語られているのは、蜜三郎の自己イメージであり、他の人間から見て蜜三郎が彼自身が考えているように見えるとは限らない。実際、彼の鷹四に対するイメージに偏見が含まれているように、自己イメージがゆがんだものである可能性はある。そして、その結果、彼は鷹四を含めた他の人間を自分の側から遠ざけ、自分では意識しないまま結果的に万延元年の一揆の時の曾祖父の行動をなぞってしまう。この点について詳しくは次回述べる。

そのあたりの蜜三郎の語りの歪み・偏りはこの後、彼の言葉に目に関するイメージや比喩が頻出することに現れている。

例えば、彼は人の眼に注目し、そこから何かを読み取ろうとすることが多い。

赤ん坊の異常→「無表情な目」「1」

菜摘子のアルコール浸りの生活→「すもものように赤」い眼「1」

鷹四→「眼に、きなくさい疑惑の色」「2」

ヤマドリの「にせの眼」「8」

また、比喩として、
「朝の光」→比喩「白内障の眼球」「1」

森の濃密な存在感→比喩「森の眼」「3」

少年時の学芸会の記憶→比喩「あたかも自分が第三の眼を持って……」「5」

夢の中「意識」→「谷間の高みを飛びかうふたつの健全な眼球」「6」

また、彼が語る視界の制限ということが後の個所でも出て来る。まず、故郷の村に戻る途中の蜜三郎が森の中を歩いている時の次のような表現がある。(P 90→6～→4)

このような「足踏み」の感覚が、次の頁にあるように、鷹四の登場で元に戻っていく、というのは、この小説における鷹四の、ストーリーを進めるという役割を示している。

また、この遠近感の喪失は、空間的な距離だけではなく、時間の距離の感覚も失わせる。(P 240→1～241→5) この個所は、鷹四や妻の菜摘子たちと離れ、倉屋敷と呼ば

れる曾祖父が一揆に備えて立てた建物(一揆の時にはその中に籠城した)で生活するようになつた蜜三郎が、夜中に降りしきる雪の中、おそらく自分の中に抱えこんでいるものに突き動かされて裸で走り回る様子を見ている、という場面である。

ここでは、現在と100年前の万延元年とを、重なり合うものとして、蜜三郎がとらえるようになってきたことを示している。もちろん、タイムマシンとかを使っているわけではないので、これは蜜三郎が、鷹四の、自分と100年前の曾祖父の弟を結びつけたい、という衝動をある種のリアリティのあるものと感じ始めていることを示している表現だが、その変化を伝えるために、距離感・遠近感という目に関わる比喩を使っている点は、非常に蜜三郎的なのである。

このようなある歪みというのかこだわりを持って語り続ける蜜三郎は、鷹四と時に共感しつつも、彼に反発し、最後には蜜三郎に救いを求めてきた鷹四を突き放す。いわば、鷹四の言っていた、「ほかの人間に本当に酷いことをするタイプ」としての曾祖父の行動を再現してしまう。そして、鷹四の死後、彼自身によるそれまでの語ってきた言葉についての相対化が行われる。

次回は、今回も最初に触れておいた鷹四の変化についての疑問点を明らかにするために、プリントに戻って残りの一揆の伝承について見ていくことにする。さらに、今回確認した語り手蜜三郎の歪みが、鷹四との関係の中でどのように相対化されていくのか、ということも見ていくことにする。

(前回のまとめ)

前回「万延元年のフットボール」の語り手である蜜三郎について、彼の語りを持つ思考・感覚の制度、つまりイデオロギーについて説明した。突然何の理由もなく片目の視力を失ってしまったと語る蜜三郎は、読み手に「あなた」と呼びかけることで、右目が見えない人間である自分から遠く離れた場所に、読み手をはじきとばしてしまおう。そのように、いわば読み手の共感を拒絶するような形で語り始められた蜜三郎の言葉には、彼の眼に関するこだわりを伝えるような表現が多く見られる。例えば、彼は人の眼に注目し、そこから何かを読み取ろうとすることが多かったり、また、比喻として、「眼」に関するもの、例えば「朝の光」→「白内障の眼球」、森の濃密な存在感→「森の眼」、少年時の学芸会の記憶→「あたかも自分が第三の眼を持って……」「意識」→「谷間の高みを飛びかうふたつの健全な眼球」また、右目の視力がなくなったために、視界に遠近感が乏しい、ということが語られもするが、その空間的な距離感・遠近感の喪失が、時間の遠近感・距離感の喪失、具体的には100年前に生きていた曾祖父兄弟、それに万延元年の一揆と、現在の自分と弟、その弟鷹四によるスーパーマーケットの襲撃とを重ねる語りを生み出してしまおう。

(P240→1~241→5)

この時既に、蜜三郎は万延元年の一揆の前に曾祖父が立て、一揆の際には籠城した蔵屋敷と呼ばれる建物で一人で寝泊まりしている。初め、(P171L3)社会に順応したたかなタイプと反社会的な冒険的な生活を送るタイプという二分法に抵抗していた蜜三郎は、しかし、鷹四の言葉に導かれるようにこの二分法を受け入れるようになっていく(P198)。そして、この雪が降る夜の場面の後から、さらに頑なに外界から自分を閉ざし、まるで100年前に籠城していた曾祖父の行動をなぞるかのようにふるまってしまう。そして、蔵屋敷に籠城する蜜三郎を挑発するように、鷹四は暴力的な方向に自分を向けていく。一種、遠回しで、回りを巻きこんだはた迷惑な兄弟げんか、という感じもあるのだが、対立しているだけではない。

鷹四が蜜三郎を挑発しているのは、蜜三郎に籠城されては、蜜三郎を自分に近い人間、自分の話の聞き手と考えている彼の期待が実現されないからだ。そのあたり、例えば、前にも触れた文庫本のP73L7で蜜三郎のことを「ほかの人間に本当に酷いことをするタイプ」ではない、と言っているのはその期待が現れているのだろうし、もっと端的にP261で次のように述べている。

この「本当のこと」という言葉は、P30で自殺した友人と鷹四がアメリカで交わした会話の中に初めて出てきて、いわば鷹四の行動の元になっているものとして小説の中でもたびたび出て来る言葉である。

この「本当のこと」というのは、小説の最後の方鷹四自身によって語られている、自殺した妹との近親相姦の関係、またそれが元で妹が自殺したこと、という風に今までずっと捉えられてきて、あまり評判が良くない。つまり、予め予想がつくとか、今さら意外性がないうえ、とかいうようなことを言う人が多いのだが、それは文学において近親相姦というのがわりとよく題材になっていて、文学慣れした批評家にはインパクトがない、ということなのだ。

ただ、この小説の中で問題なのは、近親相姦そのものではない。これは大江健三郎の小説の多くの登場人物に共通することなのだ、蜜三郎が「眼」にこだわっているように、鷹四にもこだわり続けているあるイメージがある。そのイメージとの関係で「本当のこと」というのが小説の中で機能しているのである。

前に話しておいた、プリントの上段の⑥のように、かつては曾祖父の弟と同じように曾祖父のことを誇りにしていた鷹四が、⑧で曾祖父のことを「深慮遠謀」として嫌悪し、「ほかの人間に本当に酷いことをするタイプ」と呼ぶようになった変化は近親相姦の話だけでは説明できない。

それでまず、鷹四がとらわれているイメージから説明しておくことにするが、話はアメリカでの自殺した友人と鷹四の出会いの場面に遡る。(P26→2・P35L5)

(公民権運動とは?)

この焼かれた人間のイメージは、故郷の大窪村に戻ってから登場してくる。(P119→7~121)村の寺でこれもまた曾祖父が作らせて寺に寄付した地獄絵を見ている場面だが、ここでは鷹四は地獄絵の亡者が燃やされている場面から目をそらして見ている。ここでも、続きの部分で、住職が子供の頃鷹四と現在の鷹四を結びつけるようなことを言っているが、単に怖がっているのなら、燃やされた黒人の写真を見ることがないはずで、これは他の人間と一緒に地獄絵を見ることを拒絶するくらい、鷹四が焼かれた人間というのにこだわっていた、ということである。もし、彼一人なら、焼かれた黒人の写真のように、じっと見ていたのだろう。

この鷹四の地獄絵の拒絶について、蜜三郎は次のように説明している。(P 4 3 5)
しかし、この解釈は鷹四について正しく見ていない。蜜三郎は、自分が故郷の谷間に戻ってきかから、さらに言えば鷹四のこともよくわからないままに語っている。
はさて、もったいぶってきかたが、鷹四の焼かれた人間のイメージへのこだわりは、彼の妹の死についての回想の中で明らかになっている。(P 3 9 2) ここで語っていることを読んででも、鷹四が近親相姦という社会におけるタブーを破ったこと自体に罪の意識を感じているわけではないことはわかる。いくらか自己弁護とのかか自己正当化の匂いがする言葉ではあるが、少なくとも、彼がそれ以外のことの方を重要だと思っっているのはわかる。
「中世の火刑の凶版」(ヨーロッパ)

(妹の妊娠から事情が変わり)「卑劣な裏切り」「厭らしい策謀家」
(妹に嘘をつかせ、慰めを求めてきた妹を拒絶してしまう)(P 3 9 3→5~3 9 4)
妹が自殺したのと、鷹四が見せていた「中世の火刑の凶版」とは結びついているはずで、妹は鷹四に突き放されたのに加えて、「火刑」にかけられることの恐怖から死を選んだと考えられる。少なくとも鷹四はそう考えて、「中世の火刑の凶版」を用いた「厭らしい策謀」で、妹を自殺に追いこんだ、まさに「ほかの人間に本当に酷いことを」してしまっただ人間である自分を嫌悪し、自分に「深慮遠謀」の曾祖父と同じ血が流れていることを否定しようとして、曾祖父を嫌悪し、曾祖父に抵抗した弟にあらためて自分を結びつけようとしたのである。

小説の全体をイメージにそって見ていくと、このようなことが見えてくるのだが、語り手である蜜三郎はそのような関連に気づかないままに、鷹四に言葉を伝えているように見える。それは、やはり蜜三郎が持つ偏見が彼の語る言葉に染みこんでいるためなのだが、では、その偏見はどのように気づかれるのか。それには、鷹四の自殺という出来事を経なければならぬ。

ここで、再び眼のイメージが浮上してくるのだが、まずは蜜三郎が鷹四を追いつめる場面を見ておこう。(P 3 9 6) この後の個所で、かなり激しく蜜三郎は鷹四を批判していくのだが、それがどのような批判であるか、ということよりも、蜜三郎が「意識では制御できない、突然の拒否の炎」に燃え上がるのが、鷹四が眼にまつわる提案を蜜三郎にしてきたからだ、という点がポイントである。それは、蜜三郎には一番触れられたくない点だった、特に鷹四には触れられたくはなかった点である(実際ここまで鷹四は蜜三郎の眼についてふれたことはなかった)。それはなぜか。

社会に順応して平穩に暮らすタイプ/反社会的に生きる冒険的な生活をするタイプ
という二元論からすると、突然の暴力に社会い、右目の視力を失うのにふさわしいのは、鷹四の方ではなくのだが、実際にはそれは蜜三郎の身に起こった。それ自体蜜三郎にとってのは納得できないことだが、さらには本来自分代わりにも右目を失うべき(べき、というの強いが)鷹四から眼をゆずれられる提案を受けると、このあたりは耐えられないか、つたというところである。このあたりの自分自身の心理状態も、蜜三郎自身は分かっているよである。そして、結果として彼は、鷹四の語る曾祖父と同じように、鷹四に対して「本当に酷いことを」して、弟を死なせてしまっただけに、ここでも蜜三郎は曾祖父の役割を演じてしまっている。

ただ、「万延元年のフットボール」では最後の章で、いわばどんでん返しとして、それまで語られてきた曾祖父と曾祖父の弟についてのストーリーとは全く違うものが出て来る。それが、プリントの最後の⑭である。

この新事実(もちろん、これ自体があるイデオロギー、つまり思考の制度に則った解釈でしかないわけだが、とりあえずそれがきっかけとなって)により、蜜三郎は鷹四と自分の関係を考え直す。
その時に、ポイントになってくるのが、実はまた眼なのである。(P 4 3 9→2~4 4 0)

蜜三郎の眼に注目してここまで「万延元年のフットボール」を見てきたが、実はこのとらえ方は、この小説の最後のこの部分から逆に読み直して可能になった読みなのである。冒頭の「あなた」への呼びかけの部分にせよ、時間の遠近感を失う場面にせよ、この個所から逆に戻っていくことであらためて見出すことが出来たものであり、この授業での説明自体が実際の考え方と逆向きであり、この最後の場面とこの場面にいる様々な眼および視界に関する表現・イメージこそが「万延元年のフットボール」という一人の登場人物に視点点が限定された、つまりかなりはっきりした小説の語りを相対化するためのしかけなのである。

「万延元年のフットボール」のようにはっきりとわかりやすく、このようなしかけがある小説ばかりとは限らないが、一つの小説の中でどのようなイメージが繰り返し出て来るか、逆にどのようなイメージが出てこないか、というのは読む上でのポイントになる点である。

(前回のまとめ)

去年の4月から12月まで、大江健三郎の1957年のデビューから1967年に発表されたおそらく彼にとってはもっとも重要な長編小説である「万延元年のフットボール」までについて、話をしてきた。

今回は最終回だが、「万延元年のフットボール」以後の大江健三郎の仕事の展開について概略を話すことにする。1970年代に入ってから大江健三郎の仕事の特徴づけるのは、自分の小説の方法について、自己解説的な文章を書くようになる、または理想的な読者を作り出そうとして、小説の理論について述べたエッセイを書くようになる、ということである。

「万延元年のフットボール」以前にも、小説の方法について書いたエッセイというのはあって、例えば、『厳粛な綱渡り』に収められているエッセイの中でも、259頁からの「困難の感覚ということ」というエッセイなどは、「性的人間」と「叫び声」を書くときに出会った「困難」について語ったものである。このエッセイはもともと、『文学』という雑誌の「私の小説の方法」という連載(いろいろな小説家が毎回交替で書いて行く)の一回として書かれたものである。

しかし、このような単発のエッセイとしてではなく、まとまった連載・または単行本として、小説の方法・理論について書くようになったのは、1970年代に入ってからである。そのあたりは、「万延元年のフットボール」が評価されたことで、大江健三郎の文壇内での位置も定まり、そういう方法に関する文章を書くことが許されるようになった、ということもあるだろうし、大江健三郎の方もそういうものを書くことである程度の注目を受けることは意識していただろう。

(プリントを配る)

1974(昭和49)年「文学ノート」

1978(昭和53)年「小説の方法」

構造主義 ロシア・フォルマリズム 受容理論

では、「万延元年のフットボール」発表以後の大江健三郎の小説家としての活動はどんなものだったかということ、それがA4の方のプリントである。

1960年代後半から70年代にかけての主な大江健三郎の仕事

- 1967(昭和42)年 「万延元年のフットボール」
- 1968年 全エッセイ集第2『持続する志』
- 1969年 短編集『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』
- 1970年 評論『壊れものとしての人間—活字の向こうの暗闇』
エッセイ『沖縄ノート』
「文学ノート」の第一回を『新潮』12月号に発表
- 1971年 対談『原爆後の人間』
- 1972年 全エッセイ集第3『鯨の死滅する日』
中編集『みずからわが涙をぬぐいたまう日』
- 1973年 作家論集『同時代としての戦後』
「文学ノート」最終回を『新潮』8月号に掲載
書き下ろし長篇小説「洪水はわが魂におよび」(9月)
- 1974年 『文学ノート』(『新潮』に発表したエッセイ+「洪水～」の未使用草稿
(1975年頃から、構造主義・ロシア・フォルマリズム関係の用語を使い始める)
- 1976年 評論集『言葉によって 状況・文学*』
長編小説「ピンチランナー調書」
- 1977年 講演記録「現代文学研究者に何を望むか」
(W・イーザーの受容理論(「期待の地平」)に言及)
『大江健三郎全作品』第Ⅱ期全六巻
(「万延元年のフットボール」～「ピンチランナー調書」)
- 1978年 書き下ろし評論集『小説の方法』
評論集『表現する者 状況・文学**』
- 1979(昭和54)年 書き下ろし長編小説「同時代ゲーム」

この多様な仕事の中で特に小説の方法に絞って書かれているのが、先程名前を挙げた二つである。

プリントを使って話す。